

風景を計画する

ライン学による新興住宅地の風景化

Planning the scenery

Planning the new residential areas scenery by learning from linealogy

11723002

大藤 美里

主査 宮 晶子

准教授

副査 佐藤 克志

教授 是澤 紀子

准教授

たわいもない日常の風景に何故人は惹かれるのだろうか。そのような風景を、均質化された新興住宅地は失ってしまっているのではないか。この二つの命題を追求するべく、本修士制作では、豊かな「風景を計画する」ための考察と提案を行う。新興住宅地と同条件としたオルタナティブな区画計画及び、住宅ユニットの設計提案を行う。

日常の風景の分析を通して、風景の構造は構成／状況／記憶の3軸からなるという考察と、ティム・インゴルド氏のライン学から、人の営みとしてのラインを計画の手法として用いる。特に、記憶の軸が構成・状況の軸とともに存在していることが重要である。土地の歴史性をたどり、過去から現在までを「軌跡のライン」として可視化することで新たな区画を計画するとともに、建物群としてのまとまり方と関係性のあり方を「集積のライン」によって分析し、街区内の配置計画の手立てとする。

Keywords: Scenery, Planning, Linealogy, New residential areas, Memory, Relationship

風景, 計画学, ライン学, 新興住宅地, 記憶, 関係性

1. はじめに

1-1. 研究の背景

1-1-1. 日常の風景に対するまなざし

街を歩いていると、ふと目を奪われ、つい写真に収めたくくなるような魅力的な風景に出会うことがある。そんな出会いは、旅先で初めての場所を訪れたときはもちろん、いつも通っている街でも、ふとした拍子や、いつもと違った道を選んだりしたときに訪れることがある。また、友人と同じ風景に惹かれ、同じような写真を撮っていたこともあれば、他の人にはピンとこないような風景を、一人でひたすら眺め続けることもある。

以前、愛媛県の大島という小さな島を訪れたときは、魅力的な風景との出会いの連続であった。軒先に吊るし干された玉ねぎの列や、いろいろなタイプの椅子を持ち寄って、街中の小屋で将棋を指す島の人々の姿や、民家と民家の間からチラリと見える海への視線の抜けなど、たくさんの風景を、自らの体験を伴って目の当たりにした。

島での体験は、初めて見る光景であるのにもかかわらず、何故か知っているものでもあるような、その島のたわいもない日常の一片

であった。

このような日常の風景に人はなぜ惹かれるのか。そしてそんな風景を計画してつくりだすことができるのか。その命題を追求することが、私の修士制作においてまず一つの大きなテーマであった。

1-1-2. 新興住宅地の産業化

一方で、均質に区画化された現代の新興住宅地は、はたして風景と呼べるのだろうか。

郊外生まれ郊外育ちの私は、築40年を超える瓦屋根の木造住宅に住みながら、鉄道インフラの整備に伴って駅前に次から次へと新興住宅地が建ち並んでいく異様な光景を、もう10年以上間近で見してきた。このような風景はどうしても、コピー&ペーストされた商品の羅列であるという印象を拭えない。

そもそも、かつての家づくりは「文化」や「風景」の領域に属していた。その土地にある材料と技術を用い、その土地の生業と共に集落が形成され、家をつくること＝生活することであった。住民たちは個としてではなく、常に生活を共有しあう人々として存在していた。家づくりの過程そのものが美しい風景を形成していたといえる。しかし、第二次世界大戦後、大量生産を目的として効率化が図

られた家づくりは、かつての「文化」や「風景」の領域から、「産業」の領域へと移行した。その結果、生まれたのは大量の商品としてのハコと、消費者としての個である。ハコをまたいで生まれる関係性や、ハコとハコの隙間に伸びていくような関係性はほとんど生まれない。これが、本研究のもう一つの大きなテーマである。

1-2. 研究の目的

このような、商品としてのハコが建ち並ぶ住宅街においては、居住者の場所の記憶はどのように形成されるのだろうか。宮本佳明は著書『環境ノイズを読み、風景をつくる。』の中で、次のように述べている。

「建築や風景は、たとえ文化財的な意味を持たなくとも、つねに個人にとっては記憶の器としての側面を持つ。場所の記憶があつてはじめて「この街が私の街である」という感覚がもたらされる。だとすれば、その記憶をもたらず源泉である風景が、「計画」の志向するがままに均質化へと向かうならば、それはすなわち「私」の存在感の希薄化を意味することにならないだろうか。」

街への愛着をもたらすものは場所の記憶であり、場所の記憶とは、日常の風景がいくつも連続して立ち現れたり、自らの体験を伴ってその風景を認識することで形成される。

故に、「計画」せざるをえない新興住宅地においても、そのような街への愛着や、居住者の原風景を形作る豊かな風景体験をつくりだすことが必要不可欠であるはずだ。

本研究では、家づくりが産業の領域へと移行してしまった結果、風景となりえていない均質化住宅地において、既存住宅地と同条件としたオルタナティブな区画計画及び、住宅ユニットの設計提案を行い、豊かな「風景を計画する」ことを目的とする。

1-3. 研究の構成

本制作の構成を、Fig1に示す。

1. はじめに	日常の風景への興味の探求から、現在均質化された新興住宅地にかわるオルタナティブな区画計画を行い、豊かな風景を計画する。	1-1. 研究の背景 1-1-1. 日常の風景へのまなざし 1-1-2. 新興住宅地の産業化 1-2. 研究の目的 1-3. 研究の構成
▽		
2. 風景について	風景についての文献調査及び、写真を用いた風景の分析を通して、風景の構造を明らかにする。	2-1. 風景についての見解 2-2. 風景の分析 2-2-1. 目的・手順 2-2-2. 結果
▽		
3. 新興住宅地の産業化	ラインの概念を用いて、住宅地形成について考察を行う。	3-1. ティム・インゴールドによるラインの概念 3-1-1. ライン学とは 3-1-2. ライン学における場所の概念 3-1-3. ライン学における関係性の概念 3-2. ラインの概念を用いた新興住宅地についての考察 3-2-1. 住宅地の形成について 3-2-2. 家同士の関係性について
▽		
4. 風景を計画する具体的な手法	ラインの概念を用いた分析と風景の分析を通して、区画計画並びに街区内の配置計画、及び住宅ユニットの設計を通して風景を計画する。	4-1. 敷地概要 4-2. ラインによる敷地分析から手法を導く 4-2-1. 軌跡のライン 4-2-2. 集積のライン 4-3. 風景の分析から手法を導く 4-3-1. 構成 4-3-2. 状況 4-3-3. 記憶 4-4. 風景をつくるための住宅ユニット
▽		
5. 結論		5-1. 今後の課題

Fig.1 研究構成

2. 風景について

2-1. 風景についての見解

本項では、「風景」という言葉に対して、文献を通して知見を広げることが目的とする。

辞書で「風景」を引いてみると、その意味は主に、「1：目に映る広い範囲のながめ。景色。風光。2：ある場面の情景・ありさま。3：風姿、風采、人の様子。」とある。

また、西田正憲の論文『風景論から風景の政治学へ』では、景観と風景の違いについて、「景観は客体である対象に即して語る用語であるのに対し、風景は主体である人間に即して語る用語である」と述べている。また、「個々の要素を超えたひとつの新しい全体が意識されるとき、風景は初めて誕生する」のであり、「風景とは視覚的、美的、情緒的に統一体として再形成されたもの」であるとも述べられている。つまり、風景とは人間の主観であり、主体によって多様な風景が存在するということである。また、風景とは単に視覚的な情報だけではなく、主体の美的感覚や過去の記憶などにも影響を受けて形成される。

西田氏はさらに、風景の生成について次のように述べる。「風景をまず発見するのは、外部のまなざしであって、内部のまなざしではない。既知の風景が未知の風景になることによって風景が生成する。」このことから、風景を認識するメカニズムとして、外部のまなざしによって既知の風景が未知の風景として見え始めること、そして空間的・時間的に距離を持ち、相対化することによって、風景に気がつき始めることなどが挙げられる。さらに、私の個人的体験から、過去の記憶の中で形成された既知の風景が未知の風景と重なったとき、風景として認識する場合もあると考える。

また、乾久美子は日常にあるたわいもない風景を「小さな風景」と呼び、膨大な写真分析から、それらの内部にある構造を見つけ出すことを試みている。リサーチの方法について、手段を写真に限定していることで、風景という曖昧な現象に対して、「写真という徹底的に視覚的なものといった還元することで、対象を客観的に見ることが可能になるのではないかと述べている。さらに、サービスという概念を用いて、分類された写真群を分析しており、その場で人に何が提供されているのか、その提供されたサービスはどのような価値を持っているのかという一元的な視点を通して、風景という多岐にわたる現象たちの構造を読み取ろうとした。

2-2. 風景の分析

2-2-1. 目的・手順

次に、風景の魅力を明らかにするとともに、自らの言葉で風景を定義することを目的とし、収集した風景写真を用いて分析を行う。分析の手順は以下の通りである。

手順1：風景の選別

手順2：風景の分類

手順3：風景の構造マトリクス化

手順1においては、「風景」という広義な言葉が持つ可能性をそのまま分析の対象としたかったため、自身が撮りためた写真の中から、感覚的に風景として惹かれる写真を選別する方法をとった。

手順2では、選別された風景について、どんな点に惹かれたのかを明らかにしながら、グループ化を行った。グループ群にはそれぞれにネーミングをすることで、特徴や、どの要素に一番惹かれたの

3. 新興住宅地の産業化

3-1. ティム・インゴルドによるラインの概念

3-1-1. ライン学とは

人類学者のティム・インゴルドは、著『ライズ 線の文化史』においてライン学を提唱している。ラインとは成長と運動の道筋であり、インゴルドは、人間の日常的活動のあらゆる場面においてラインは存在していると述べ、人間の身ぶりそれが記す痕跡との関係、つまりラインとそのラインを生み出す手の関係や、ラインと痕跡が記される表面との関係について、人類学、考古学、芸術、建築などあらゆる分野をまたいで論じている。

3-1-2. ライン学における場所の概念 “ハブと結び目”

インゴルドはラインについて次のように述べている。

「編み込まれた糸であれ、書かれた軌跡であれ、それらのラインはみな運動し成長するものとして知覚される。それなのに今日私たちが問題にするラインの多くがかくも静態的に見えるのはいったいどういうわけなのか？」

現代を生きる私たちの生活は、目的のある場所においてのみ営まれ、目的と目的を行き来するという行為は単なる移動でしかない。つまり目的が先行しており、それらをつなぐ連結器としての道が存在するということである。本書の中でインゴルドは、そのような考え方をハブ・スポーク・モデルとして、批判の対象としている。

Fig5 にハブ・スポーク・モデルを示す。中心の円は目的のための場所を表わし、点はそこで生活する居住者であり、直線は輸送ネットワークの連結器を示す。

近代化によって、目的化された場所には人間の生活や活動の全てが包括され、中枢を担うようになると、ラインは、その場所同士をつなぐ連結器としての機能しか持たなくなった。ライン自体は成長も発展もなく、またライン同士で絡み合うこともなくなった。

それに対して、オーストラリア中央砂漠のアボリジニ、ワルビリ族を例に、絡み合う生のラインの結び目としての場所の概念の重要性を論じている。

Fig6 が、ラインの結び目としての場所の概念図である。ラインそのものが生きた居住者であり、中央の結び目が場所を示す。

前述したハブ・スポーク・モデルと比較すると、このモデルでは、ハブ（場所）は、その中に収容されている個人（中央の黒い点で表される）、そしてそれらを連結しているライン（中央からスポーク状に伸びるラインで表される）とは、はっきりと区別されるのに対し、結び目としての場所とは、何かに沿って伸びる生活者個人のラインから形成されている。それどころかラインたちは結び目を超えて、必ず他の結び目のなかで他のラインと一緒にになる。一つひとつの場所は結び目であり、いくつもの結び目が結ばれることでできた全体は、網細工であるとインゴルドは述べる。

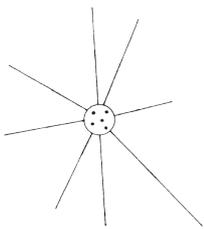


Fig. 5 ハブ・スポーク・モデル

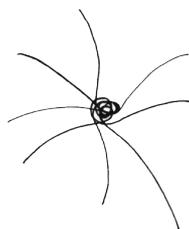


Fig. 6 結び目としての場所

3-1-3. ライン学における関係性の概念 “チェーンと結び目”

次に、同じくティム・インゴルドの著書『ライフ・オブ・ラインズ 線の生態人類学』を元に、関係性の概念について考える。インゴルドは、物を接ぐとはなにを意味するのかということについて、それはなんらかの結び目で物をくくると述べている。「それらの物は、端と端を接がれるのでも、並んで接がれるのでもなく、真真中で接がれているのである。その両端は結ばれておらず、他のラインが絡まるように差し伸ばされている。」

一方で、接ぎ目とは正反対の物に関係するものとして、チェーン構造をあげる。「剛性要素（またはブロック）は、左右あるいは両端を外部からつながれている。硬くないものや固体でないものは、こうした要素の内部に閉じ込められている。」これは接ぎ目ではなく、分離である。

さらに、次のように続けている。「チェーンと結び目を比較する中で、わたしはチェーンが記憶を持たないことに気づいた。チェーンの張力を解いて地面に落とすと、チェーンは無秩序に積み重なった状態になる。だが、結び目のあるロープをほどいてまっすぐにしようとしても、ロープはよじれや曲がりといったものを留めていて、機会があれば前と同じような形態に丸まろうとする。」チェーンは外部からの力につながれているが、内部のものは依然として個のままである。チェーンをばらばらにすると、なんの関係性や記憶も持たない個の集合に戻るだけである。一方で、結び目をくくるとは、記憶をくくるとのことである。結び目を解いても、そこには記憶があるため、くくるときの状態に戻ることは二度とない。

3-2. ラインの概念を用いた新興住宅地についての考察

3-2-1. 住宅地の形成について

3-1-2で述べた場所の概念を用いて、住宅地の形成について考えを深めてみる。かつて、生業とともに人々の暮らしがあったとき、集落形成の軌跡は連続的で活動的であり、ラインそのものが結び目となって場所を形成していた。ライン自体が動き、生きているラインであったと言える。しかし、現代の均質化された新興住宅地は、最初に全体が決定され、その中を点と点を結ぶようにラインが引かれていった。このラインは連結器としてのラインでしかなく、一度引かれたラインが活動することはない。連結器としてのラインを、生きられた軌跡としてのラインに変えることが重要なのではないかと考える。

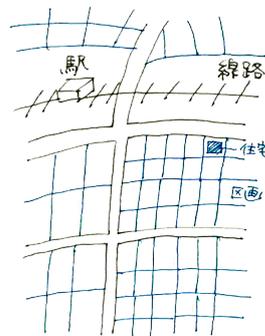


Fig. 7 新興住宅地
連結器としてのライン

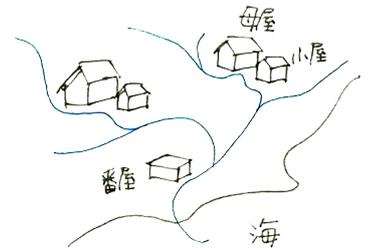


Fig. 8 集落
軌跡としてのライン

3-2-2. 家同士の関係性について

次に、3-1-3で述べた関係性の概念から、住宅群においての家同士の関係性について考察する。

現在の均質化された新興住宅地では、先述したチェーン構造によって住戸同士の関係性が成り立っていると考える。住宅という一つのハコが、街区というチェーンによってつながれており、チェーンを壊せば一つ一つはばらばらである。両端がつながれているため、それぞれは同じ方向を向いて整列するしかない。

このようなチェーン構造を、結び目によってくられた、記憶を共有するような関係性に変えていくことが必要である。



Fig.9 チェーン構造



Fig.10 結び目構造

4. 風景を計画する具体的な手法

本提案では、均質化された既存住宅地にとって代わる区画計画を、ラインによる分析と風景分析を用いた方法論によって提案すること、そして、その区画計画に適した住宅ユニットの設計提案を通して、住人たちの記憶に残るような豊かな風景のある住宅地を作ることを目的とする。

4-1. 敷地概要

対象敷地は、茨城県守谷市松並とする。つくばエクスプレス守谷駅から徒歩圏内の場所に位置し、2014年から、三井不動産レジデンシャルによって宅地開発が進められた、松並青葉地区を対象とする。



Fig.11 対象敷地

つくばエクスプレス線は、2005年から営業を開始した茨城・千葉・埼玉・東京を通る首都圏北東部動脈となる鉄道であり、開業に合わせて、沿線地区では各所で大規模な駅前開発が行われた。守谷駅は、秋葉原駅まで直通32分と都心へのアクセスも良く、大規模宅地開発の需要は高く、現在大量の住宅を生産することを目的に土地区画整理が行われている。

設計範囲および、既存の区画計画を行った三井不動産レジデンシャルの計画概要をもとに設定した本提案の計画概要を次に示す。

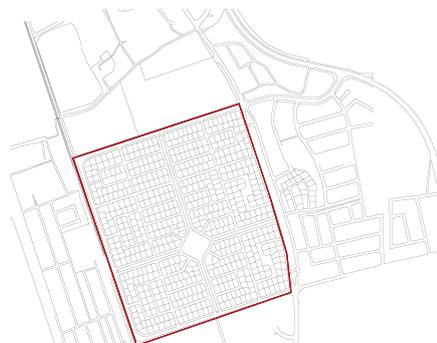


Fig.12 設計範囲

総区画数	600区画
構造	木造
工法	2×4工法
用途地域	第一種低層住居専用地域
建ぺい率・容積率	建ぺい率50%、容積率100%
間取り	4LDK
敷地面積	165㎡以上
延べ床面積	103㎡~104㎡

Fig13. 計画概要

4-2. ラインによる敷地分析から手法を導く

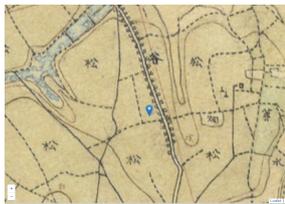
本項では、ラインの概念を用いて、対象敷地の分析を行う。軌跡のラインは、その土地の歴史性をたどるものである。かつての自然発生的ないきいきとしたラインから、現代の計画によって引かれた画一的なラインまでを可視化することで新たな区画計画へと昇華させる。

集積のラインでは、建物群としてのまとまり方と、そこに生まれる関係性のあり方を分析することで、住宅地における関係性の構築のための手法を模索する。

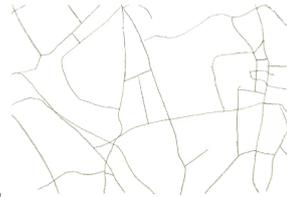
4-2-1. 軌跡のライン

対象敷地である松並青葉地区は、もともとは山林地区であった。1962年から、敷地内の一部にクレトイン株式会社の東京工場が建設され操業を開始した。1995年に工場は閉業し、それ以降は工場跡地として、緑地が広がっていた。その後、三井不動産レジデンシャルが工場跡地を買い取り、大規模な宅地開発を行った。

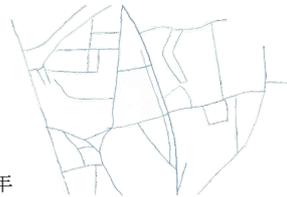
様々な歴史性をもつこの土地がかつて刻んできたラインを軌跡としてのラインとして取り出す。取り出してきたラインを見ると、この土地には、工場建設の前後で大きく二つのフェーズが重なっていることがわかる。工場建設前の明治期及び1961年、工場建設後の1988年及び2018年のラインを重ね、区画計画を行う。



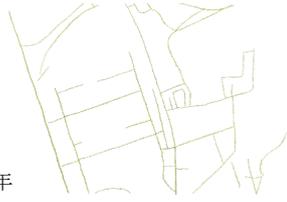
明治期



1961年



1988年



2008年



2018年



Fig. 14 軌跡のライン



Fig. 15 既存敷地に重ねる

4-2-2. 集積のライン

次に、計画地と同じ茨城県内の住宅地を比較しながら、集積のラインを用いた分析を行う。比較の対象とするのは、私の祖父母宅がある、茨城県つくば市六斗地区である。六斗地区は、田畑を所有している農家が多く、各世帯が細長く敷地を持っている。住宅の流れが田畑へと連続しており、農作業の流れと共に、時間をかけて形成されたラインが見られるのが特徴的である。



Fig. 16 a: 守谷市松並青葉地区



Fig. 17 b: つくば市六斗地区

集積のラインとは、アプローチ方向に対しての住宅の左側面のみをラインとして抽出することで得られる。この抽出方法によって、建物の配置及び、密度、さらに生活の方向性が同時に可視化される。

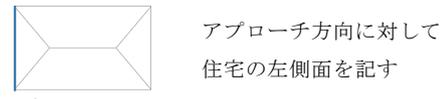


Fig. 18 集積のラインの抽出方法

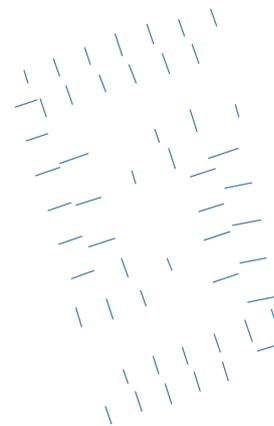


Fig. 19 集積のライン； 守谷市松並青葉地区

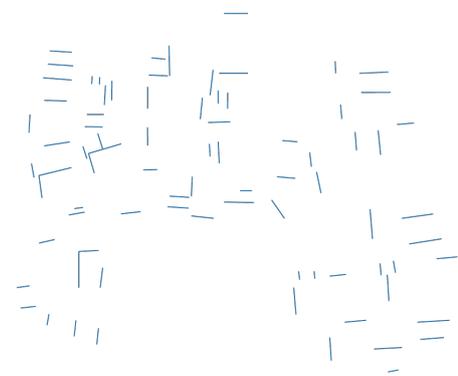


Fig. 20 集積のライン： つくば市六斗地区

まず、a 地区の集積ラインを見ると、画一的な建物配置およびアプローチ方向であることは一目瞭然である。さらに、アプローチと同じ方向に庭をもち、フェンスによって区切られた境界ラインは、隣家同士でお互いに前を向き合うという緊張関係を生む。それによって生活そのものの方向性が建物配置に準じて画一的であるという状態が生まれている。

一方 b 地区は、複雑な配置でありながら、山の尾根のような、自然に近いリズムが感じられ、建物内にとどまらない、集落全体で共有する流れのようなものを感じることができる。隣家間の関係性を見ても、同方向への視線の連続があまり見られず、a 地区にあるような緊張関係は存在しない。また、集積ラインが一部 L 字をなしているが、これはアプローチが二方向に伸びていることを表している。アプローチを二つ以上持つ住宅形式は、古い民家などによく見られるものだが、このような形態を持つだけで、外部空間との接続部分が増え、区画内での生活の方向性も複雑化すると考えられる。

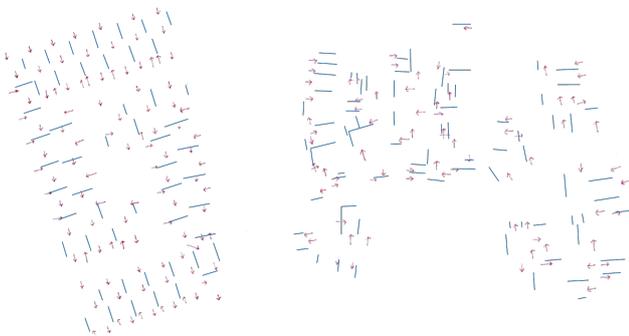


Fig. 21 集積のラインとアプローチ方向の関係

4-3. 風景の分析から手法を導く

第 2 章では、風景の具体的な事象を用いて分析を行ない、風景は構成／状況／記憶の 3 軸が総合的に含まれていることが必要であるという結論に達した。

よって、本項では、対象敷地において、その 3 軸を計画するためのきっかけをまとめる。

4-3-1. 構成

フレーミングや視線の抜けなどは、その場所にある要素がフレームとしての役割を担うこともある。例えば、樹木の配置によって、視線の抜けを操作したり、平坦な敷地に起伏をつけることで、自分のスケールを操作したりすることが可能である。

4-3-2. 状況

状況を生み出すしかけについては、住戸ユニットの形態や配置について、いくつかの手法を考えることができそうである。例えば、道にまたいで広がる関係性を生み出すために、隣地間で共有する道を通したり、外部との接続を増やすために、一階部分はピロティや土間を挿入したりするなどして、小さな生活者のふるまいが自然に生まれ出てくるようなものを目指す。

4-3-3. 記憶

記憶の軸について、この敷地において場所の記憶を生み出す要素を考える。例えば、開発区域内に残された歴史のある松並木に対して、昔の人々と松並木との関係性を思い起こさせるような区画計画

にしたり、かつて山林だった頃の風景を思い起こさせるような緑地計画を行ったり、直線ではない豊かなラインを引くことでできる曲がり道や分かれ道など、身体的な体験を通して記憶の形成につながる道のあり方などを考えることができる。

4-4. 風景をつくるための住宅ユニット

次に、計画概要並びに、ライン分析・風景分析から得た手法を用いた風景計画に適した住宅ユニットのあり方を考える。

建築面積を小さくし、敷地面積あたりの外部空間を充実させるために、3 階建住宅を計画する。同じく、敷地面積あたりの外部空間を充実させるためにピロティ空間を計画する。

2 方向へ伸びるアプローチを設けたり、土間を設けるなどして内部空間と外部空間の境界を曖昧にし、生活の方向性が様々に伸びるような平屋を計画する。

外部と接する空間を立体的にも増やし、生活者のふるまいを外部に漏れださせるとともに、上層階から街を眺めることができる新たな視線のラインを獲得するために、バルコニーや屋上を計画する。

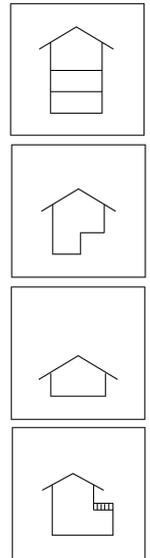


Fig. 22 住宅ユニット
ダイアグラム

5. 結論

5-1. 今後の課題

本研究では、均質化された住宅地をつくりだしてしまう宅地計画に取って代わる、オルタナティブな風景計画の方法論を見つけることを大きな目的とし取り組んだ。今回は私の地元である茨城県を敷地として選定したが、あくまでも実験的な敷地であり、今後はこの場所に限らず、様々な敷地での風景計画に応用ができるものにしたという思いで研究を進めた。そのためにはまだまだ不十分な部分も多くあるが、ラインという概念を用いて敷地を見ると、どんなに真っ平らな土地にも過去の軌跡は存在しており、それを可視化することで新たな区画整理の際のものさしに使用するという手法は、他の場所にも十分応用が可能なものなのではないかと考える。

「風景」と「計画」という、二つのテーマは今後も変わることのない私の命題である。計画するということと、計画され得ない豊かさがある、という対局なものに対する探求を今後も続けていきたい。

参考文献

単行本

- ・横浜国立大学大学院／建築都市スクール“YGSA”：Creative Neighborhoods 住環境が新しい社会をつくる，誠文堂新光社，2017 年 4 月 1 日
- ・宮本佳明：環境ノイズを読み、風景をつくる。，彰国社，2007 年 6 月
- ・新村出編：広辞苑 第六版，岩波書店，2008 年 1 月 11 日
- ・オギュスタン・ベルク：風土としての地球，筑摩書房，1994 年
- ・乾久美子＋東京藝術大学 乾久美子研究室：小さな風景からの学び，TOTO 出版，2014 年 4 月 17 日
- ・ティム・インゴルド：ラインズ 線の文化史，左右社，2014 年 6 月 14 日

- ・ティム・インゴルド：ライフ・オブ・ラインズ 線の生態人類学，フィルムアート社，2018年9月25日
- ・富永謙：建築の構成から風景の生成へ，鹿島出版会，2015年10月8日
- ・三島俊介：住宅産業のすべてが一目でわかる本，産能大学出版部，1994年9月20日

論文

- ・西田正憲：風景論から風景の政治学へ，地域創造学研究 = Journal of regional promotion：奈良県立大学研究季報 27(3), 1-31, 2017年3月
- ・宮田 義廣：風景の変容-絵画における行為性と記憶の問題-

インターネット

- ・NHK：郊外住宅地の見えない空き家
<http://www.nhk.or.jp/d-navi/link/akiya/index.html>,
- ・埼玉大学教育学部谷譲二：今昔マップ on the web,
<http://ktgis.net/kjmapw/>